

1、研究目的

本研究は、2014年に「作業員が怖い」と広野町の主婦が発したこの一言から始まった。この言葉から、作業員は住民へどのような影響を与えているのか、作業員と住民のより良い関係性とは何か、という問題意識を持ち、本助成研究へと繋がる。本研究は、福島県双葉郡広野町を舞台に、そこに住む住民と「作業員」と呼ばれる人々の関係性及び暮らしを対象とし、(1) 作業員にとって缶飲料やタバコはどのような意味をもつのか、タバコを吸う作業員を住民はどう見るか、また(2) 作業員の生活実態と生活の中で喫煙はどのような役割を担っているのか、という二つの問いを双方のタバコの主観的意味の考察を通して明らかにしていくことを目的としている。これらの問いを扱うに当たり、作業員の多くが吸い、また嗜好品の中でも諍いを起こしやすいタバコに着目することは、意義のあることであると考える。

2、研究方法

本研究では、作業員と住民への聞き取り調査と文献研究、宿舎への宿泊を通じた参与観察、広野町の作業員用宿舎の位置の地図化を主な研究方法とした。聞き取りの対象者は、原発・除染・解体・建設と様々な仕事を経験した男性作業員の三人（内、喫煙者二人）と、広野町に住む住民の女性三人であり、被調査者の自由な語りに重きを置いたインタビュー調査を行った。これまで計18日間広野町へ訪れ、インタビューは計12回行った。「作業員」とは、「福島県」の「震災復興」に関わる仕事に従事する人々の呼称として用いる。

3、研究成果と考察

本研究では、作業員の職種、広野町における作業員と住民の人数比較、作業員の居住形態、町の様子、作業員の生活とタバコの役割、タバコを用いた作業員同士の社会関係構築、住民の暮らしの中の作業員とタバコについて明らかにした。

作業員と一口に言っても、様々な職種の人々が存在する。原発の廃炉作業にあたる作業員、放射能を含む物質を集めてトンバックに詰めて安置する除染作業員、住民が住まなくなった家を解体する解体作業員、その他の土木・建築作業員である。広野町役場の独自の調査によると、広野町において作業員は2693人⁽¹⁾ 居住しており、町内の事業所を拠点として活動している人数を合わせると3974人になる。一方で東日本大震災以前は5490人であった住民の町内居住者数は、2018年3月現在4029人が帰還しており、住民と作業員はほぼ同数が町内で生活している。この作業員の増加による、劇的な人口変化は広野町の地域コミュニティにおいて大きな変化をもたらした。

広野町に居住する作業員は様々な形態の宿舎に住んでいる。社員寮、アパートの借り上げ、仮設（プレハブ）宿舎、簡易宿舎、既存の旅館、ホテル、民家などである。宿舎の地図化の過程で見えてきた

(1) 2018年3月現在、広野町役場による独自の町内作業員数調査による。但し、全てを把握することの困難さから、参考の数字に留めてほしいと言伝があった。

成果の一つとして、宿舎の多くは住民の生活道として使われている国道6号線沿いに立地しており、町民の住む団地のすぐ近くに立地している宿舎もあることが分かった。また、使用していない民家を作業員に貸している場合もあり、町役場を含めて近隣住民もその民家にどんな職種の人が何人住んでいるのか、所属する企業名などを把握できていない。「町には町民から『誰が住んでいるか分からないので不安だ』といった声が相次いで寄せられている」（読賣新聞 2017,6,24）といった状況で、町は約60施設ある作業員用宿舎へ企業名や連絡先などを記載した看板を設置してもらうよう呼び掛けるなどの対策を行っている。町民多田さん（仮名）によると、そこに住む住人が「作業員さんらしいよ」という情報は近隣の住民同士のお茶のみ話で得ているという。

他方、作業員に対する生活実践と喫煙に関する聞き取りによると、二人の現在喫煙作業員は、二人共若い頃から一日一箱の喫煙を続けており、生活の流れに喫煙の行為が自然に組み込まれていることが分かった。作業員安達さん（仮名）は作業員同士の社会関係構築の面でタバコを効果的に用いており、仕事で共に働く作業員の顔を見たくない時や一人になりたい時にタバコを吸い、そのタバコの火のついた先をじっと見て、目を合わせないようにしているという。安達さんは、共に働く作業員と共同生活をしており、家でも仕事場でも顔を合わせている。安達さんにとって、タバコは一人になるための道具、換言すれば、近い距離にいながら関係を緩く絶つための道具として用いられている。

はたまた、住民の認識は様々である。自宅のすぐ裏に作業員用宿舎が2016年に建った町民飯田さん（仮名）は、宿舎が建ったことに対する不満感をもっていた。宿舎建設以降は、宿舎に面した窓は夏も開けず、カーテンを閉め、また洗濯物は外に干さなくなった。それに加えて、「たまーに、庭に吸い殻が捨ててあるの」と、飯田さんは宿舎の外でタバコを吸う作業員をよく思ってはおらず、作業員とは目を合わせないようにし、意図的に挨拶はしないという。宿舎が建設されてから、飯田さんの生活に明らかな変化があったことが分かる。しかし、飯田さんとは違い、作業員の喫煙にさほど関心を持っていない住民も存在する。自宅の近くに作業員宿舎が立地していない町民鈴木さん（仮名）と多田さん（仮名）は、作業員が町に変化をもたらしていることは強く認識しているが、喫煙者による町への大きな変化は認識していなかった。更に、この二人の町民は、「作業員」と判断する基準の大きな要因は喫煙行動よりも、服装、顔などの「見た目」を挙げた。故に、広野町の住民にとってのタバコの意味と、一般の人々にとってのタバコの意味は大きな違いはないように思われる。

以上のことから、作業員にとってタバコは作業員同士の社会関係構築に有用であり、またその作業員の喫煙を身近に見る住民は嫌悪感を抱き、実害を被っていない住民は喫煙行為自体は気に留めていないことが結論として導き出せる。また、喫煙する作業員の生活において、公私ともにタバコは重要な役割を担っていることが分かった。

4、引用文献

読賣新聞『作業員宿舎に連絡先看板』（2017年6月24日朝刊、福島県版）